

● 駐在員ごぼれ話 ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

香港編

香港返還後10年の変化

2007年7月1日香港は中国返還10周年を迎えました。

胡錦濤中国国家主席は、記念式典の中で『1国2制度』の下での香港の成功を改めて述べました。返還直後起こったアジア通貨危機、さらにはSARSといった大事態を乗り越え、現在は過去最高の好景気となっています。

今回は、香港返還後10年の変化について、街で見かける2点についてレポートします。

○貧富の格差拡大

香港で店舗を経営されている方にお話を聞くと、現在、飲食・衣服などの消費分野のターゲット層は20歳半ば～30歳半ばの人達だそうです。香港返還前の返還バブル期に不動産や株式投資に成功し裕福になった人を親に持つ世代です。

中国返還後の香港の共産主義化を恐れた親たちが、返還前に子供達をカナダやオーストラリアなどの海外に留学させました。彼らは、香港の中心産業である金融や貿易の知識を英語力とともに身につけ、香港に帰ると好待遇で外資企業へと迎えられました。

経済的に恵まれた家庭に育った彼らは、収入の多くを、おしゃれな場所での食事や高級ブランド品の購入へと費やしています。街の中では、高級車を運転し、高級レストランで食事をする若者をよく見かけます。

一方で、月収4,000香港ドル(約6万円)以下で生活する世帯数は、この10年間で2倍の約19万世帯(全世帯の8.1%)に増加しました。この間に中間層は減少し、社会の2極化が大きく進む結果となっています。

税金が低いため、世界中からの投資マネーを集め発展を続ける香港ですが、弊害として政府による老後の保障制度は充分ではありません。今後、社会の高齢化に伴いさらに格差は開いていくのではないかと見られています。

○中国語(北京語)の普及

香港では、日常会話は広東語※を用いています。加えて、長く続いた英国植民地の影響のため、英語を理解する人も多く、レベルも高いといえます。

返還以前は、中国の標準語である北京語を香港で喋ると、香港人の反応は、あまり良いものではなかったといいます。しかし、現在、香港を歩くと観光地やビジネス街でも、あちこちから北京語が聞こえてきます。

中国経済との結びつきを背景に、現在では、観光客相手の商売だけでなくビジネスの世界でも、北京語は英語と並び重要な言語となりました。また、返還後に教育を受けた若い世代は、北京語をうまく話せる人も多く、英語とあわせ3カ国語でコミュニケーションをとれるような人も大勢います。

香港では、地下鉄などの公共機関でのアナウンスは3カ国語(広東語、北京語、英語)で行われています。

英語、北京語という現在ビジネスの中で最も必要とされる言語を多くの人々が理解できる香港は、シンガポールとならんで今後もアジア、世界のビジネスの拠点となっていくでしょう。

※中国語の方言の一つとされていますが、標準語である北京語(一般的に言う中国語)とは全く違う言葉。お互いの言葉での意思疎通は不可能。



香港返還10周年を報じる地元各紙